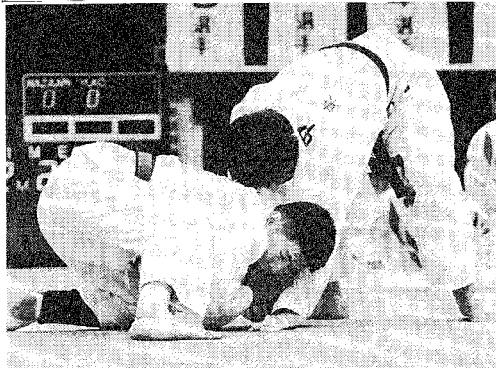


三それが最後）。決勝中堅戦、近藤喜平は床でかみ合いでがら。東京・甲斐の首にすがりついた。指が二本、えりにかかり、ゲッソ首を締めた。甲斐の手が搔れ、マツタのサン。大歓声の中、勝利を告げる。「本ノ」の声がかかった。

結果は、有効二つの東京に



柔道競技成年男子の部決勝戦。チームを優勝に導いた近藤克幸選手(左)=愛知県武道館で

取った。愛知は先ほどの内村から、南の人にたどりて感心した。二年後の柔道生活の「ターニングポイント」が、この優勝を決めた。「たまたま手が入つただけですよ。ウチはほかの選手が強いから、自分は足を引っ張らないようにと、それだけで……」。主将でもある近藤は、勝敗を左右した一本に頭をかく。だが、その照れ笑いの裏には、「この後で勝利をつかんだ。(井元)

国体は最後に、総合競技の試合が  
入選と賞状があつた。  
難しい体勢からの送りえり  
縮め、「最後だと思ったから  
できただんじようね」。平成  
元年、鹿児島大時代に全日本  
学生選手権71kg級で3位など  
の戦績を持つ。「でももう限  
界。」ここまでやらせてくれた